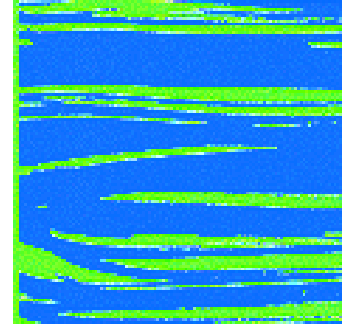


# 日本行動分析学会ニューズレター J-ABA ニュース



2007年 冬号 No. 45 (2007年2月19日 発行)

発行: 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学文学部心理学研究室内

FAX: 075-465-7882 (日本行動分析学会事務局と明記)

URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: [j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp)

---

緊急: ABA2007 サンディエゴ大会参加助成 .....	国際・渉外委員会
WCBCT2004 記念若手研究奨励基金 .....	国際・渉外委員会
投稿論文カテゴリーの新設! .....	編集委員会
日本の行動分析家へのメッセージ .....	リンダ・ヘイズ
学会サービス電子化アンケートの結果 .....	広報委員会
自著を語る: 『アクセプタンス&コミットメント・セラピーの文脈: 臨床行動分析におけるマインドフルな展開』への招待~『海辺のカフカ』風 .....	武藤 崇
自著を語る: 『猫のクリッカートレーニング』 .....	杉山尚子
自著を語る: 『みんなの自立支援を目指すやさしい応用行動分析学』 ...	高畑 庄蔵
海外在住会員の皆様へ .....	事務局

---

## 緊急: ABA2007 サンディエゴ大会参加助成 国際・渉外委員会

ABA2007 サンディエゴ大会に参加するj-ABA 学生会員で、該当する資格をお持ちの方は、75000 円の助成が受けられる枠が1名分残っております。

締 切: 2月28日

助成額: 75000 円

資 格:

- 2006年4月1日現在j-ABA 学生会員であること。
- ABA2007 で発表を受理された者。
- 過去にこの助成を受けていないこと。

---

## WCBCT2004 記念若手研究奨励基金による発表助成 国際・渉外委員会

WCBCT2004 は神戸にて成功裏に開催されました。共同開催いたしました日本行動療法学会、日本認知療法学会、日本行動分析学会の3学会はWCBCT2004 を記念して「WCBCT2004 記念若手研究奨励基金」を発足させました。

この「基金」はわが国における行動療法・認知療法・認知行動療法の一層の発展に資することを目的として運用されます。具体的にはWCBCT2007 および WCBCT2010 に参加し発表される若手研究者の助成に使用されます。

つきましては2007年7月にバルセロナにて開催されますWCBCT2007に参加・発表される若手研究者から助成希望を募りますので、積極的に御応募下さいます様に御願いたします。

#### 助成要領

1. 助成対象者の条件 日本行動療法学会、日本認知療法学会、日本行動分析学会のいずれかに所属している研究者を対象とします。

2007年のWCBCTで筆頭著者として発表される方で、年齢制限は設けませんが若い人を優先して選考する方針とします。

口頭発表、ポスター発表、一般演題、シンポジウムなど発表の場や形式などは問いませんが、申請時に日本国内に居住していることが必要です。

2. 助成の額、助成対象者の義務など 助成金額は一律10万円とします。

助成金の使用目的はWCBCT2007での発表に関わることであれば用途を問いません。

助成金額は助成対象者の銀行口座宛に振り込まれます。

助成対象者はWCBCT2007の終了後1ヶ月以内に1200字の発表報告書を各所属学会へ提出することを求められます。

3. 助成申込み方法 各学会のホームページから助成申請書をダウンロードし、必要事項を記入していただき下記の住所宛に2007年2月末日必着にて郵送してください。

#### 助成申請書郵送先

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学総合文化研究科・教養学部

心理学研究室 丹野義彦先生宛

電話 03-5454-6265

電子メール ctan@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

4. 選考および結果の発表方法 日本行動療法学会、日本認知療法学会、日本行動分析学会の3学会からの委員による助成選考委員会の審議により助成対象者を決定し、2007年3月中旬頃に対象者宛に通知いたします。

なお、選考結果は各学会ホームページ上に掲載いたします。

---

## 投稿論文カテゴリーの新設！

編集委員会

論文の迅速な発行を目指して、新たな論文カテゴリーを増設することに決定しました。これまでは、原著(Article)、実践研究(Practical Research)、短報(Short Report)、テクニカル・ノート(Technical Note)、展望(Review)、討論(Discussion)、解説(Tutorial)と書評(Book Review)でしたが、新たに、研究報告(Research

Reports)が加わります。

研究報告(Research Reports)は、速報性を重視し、本誌4ページを限度とします。

ちなみに、原著は本誌14ページ、実践研究は本誌10ページ、短報とテクニカル・ノートは本誌7ページ、展望は本誌20ページ、討論は本誌14ページ、解説は本誌20ページとなってい

ます。

研究報告 (Research Reports) は、短報やテクニカル・ノートより短い論文になります。一方、行動分析学会大会発表論文集では、1論文あたり2ページが一般的ですが、これの約2倍の枚数になります。大会発表論文集の原稿を推敲しているとき、もう少し枚数があったら十分な情報が伝えられるのだがと感じられた会員の方も多いと思います。大会発表論文集の原稿をより詳しくした程度とお考えいただければ良いと思います。大まかな言い方をしますと、大会発表論文集より詳しく、短報やテクニカル・ノートより簡潔な論文という位置づけです。

書式は、短報やテクニカル・ノートと同様に、

英文と和文のアブストラクトを加えてください。

皆様のより積極的な投稿をお待ちしております。

投稿を予定されている会員の皆様へのお願い  
これまでの論文投稿規程には、電子ファイル (Word ファイルあるいは一太郎ファイル) の提出を要件に加えていませんが、迅速な査読を行うため、ご投稿いただく場合は、印刷された論文にFDあるいはCDに記録された電子ファイルを添えてください。また、可能なら e-mail でも添付ファイルとしてお送りください。もし難しい場合は、従来通り印刷した原稿をお送りください。編集部で電子化します。

---

## 日本の行動分析家へのメッセージ

リンダ・ヘイズ (ネバダ大学リノ校/ 慶應義塾大学特別招聘教授)

昨年8月にネバダ大学リノ校のリンダ・ヘイズ先生が、慶應義塾大学特別招聘教授として来日されました。リンダ・ヘイズ先生は、様々な心的機能 (記憶、推論、夢、言語、想像、認識など) や高次の行動に関する、理論的、実験的分析に優れた業績があり、2004年から2005年まで、国際行動分析学会 (Association for Behavior Analysis: An International Organization) の会長をつとめられました。そのリンダ先生から日本の行動分析家に向けてメッセージを寄稿して戴きましたので、訳文と併せて掲載致します (編集部)。

でも好運なことであり、その実現に御尽力戴きました慶應義塾大学の山本先生と坂上先生にお礼申し上げたいと存じます。このような経験を通して私は、行動分析学<sup>(注1)</sup>が、以前にもまして熱心に求められていること、さらに応用行動分析への要求が増々拡大していることを確信させられました。しかし同時に、行動分析学のなかでも、行動の解釈に関わる部分については、行動分析学が生まれた今から半世紀以上前の状態から、それ程進歩していないこと、そして行動分析学の根底をなす哲学が、批判的に分析されることなく、発展途上の段階に留まっていることを痛感致しました。

このような欠点が気になってしまうのは、それが正に私が関心を持って研究している行動分析学のテーマだからかも知れません。いずれにせよ、複雑な人間行動を解釈するための十分な訓練を提供するような行動分析学の授業科目が大学院には殆どありませんし、行動分析学の哲学を教える授業に到っては、更に少数です。こ

---

最近3年ほどの間、私はアメリカ国内を始めとして、世界中のいろいろな国々で行動分析学について講義や講演をするという、大変貴重な機会を与えて戴いてまいりました。今年の夏に、東京でも、そのような機会を持てたことは、と

うした訓練不足以上に問題を難しくしているのは、行動分析学を今後とも意義のある正当なものにしていくうえで、こうした問題がとても重要であることが、十分に理解されていないことです。私は、解釈技術の不足が、基礎行動分析学と応用行動分析学の溝を広げてしまうことを心配しております。基礎行動分析学と応用行動分析学が適切な関係を保てなくなれば、基礎行動分析学は回復不可能なまでに力を失ってしまい、応用行動分析学は科学としての基盤を失ってしまうでしょう。行動分析学を支える哲学に対する無知によって、行動分析学が、旧弊な考え方により蝕まれてしまうことも心配です。行動分析学の最も独創的で強力な特徴は、その自然科学的前提にあるのですが、気づかぬうちに、その前提を危険に晒してしまうのではないかと危ぶんでいます。殊に今後、自然科学的前提を全く持たない他の領域と学際的な関係を結ぶとき、その恐れがあります。このような理由から、私は、世界中の大学院で行動の解釈と哲学の研究をもっと盛んにすることを奨励するのです。

今回、私の授業に出席してくれた学生達の学問的な態度と知的好奇心は、行動分析学の未来に大いなる希望を持たせてくれるものでした。彼らが行動分析学において主導的な役割を果たせるようになりつつあるのは、先生方の御指導の賜であり、素晴らしい日本の行動分析学のカリキュラムに関わる全ての方々に、なかでも特に佐藤方哉先生には謹んで敬意を表したいと思

います。

もう少し気軽な、でも、楽しさや文化的である点では決して劣らないことをお話ししましょう。日本滞在の間、私を歓迎して下さった全ての皆様にお礼申し上げたいと思います。私の友人である山脇学園短期大学の杉山尚子さんには、本物のお鯨を御馳走して戴きました。慶應義塾大学大学院の直井望さんは、毎日お昼を食べながら日本の文化について教えて下さいました。ありがとうございました。それから、《カラオケ》を御一緒して下さいました方達にもお礼申し上げます。《ザ・ブルーハーツ》<sup>(注2)</sup>のCDは良い思い出です。素晴らしく優雅な日本文化と、その絶え間なく進歩する姿の両方を経験できた全ての機会に感謝致します。本当にありがとうございました。

---

注1: 訳者が参加した講演会の席上、フロアからの質問に答えて、リンダ・ヘイズは「私にとって行動科学とは行動分析学のことである」という主旨の発言をしていたので、the science of behavior を「行動分析学」と訳した。

注2: 原文は“the Blue Notes CD”となっていたが、関係者に確認したところ、日本のロックバンド“THE BLUE HEARTS”のCDだと分かった。このバンドを代表するヒット曲であり、カラオケの人気曲に「リンダリンダ」がある。確認の労をお取り戴いた東京女学館大学の井垣さんにお礼申し上げます。

— 訳・望月 要

---

## 日本の行動分析家へのメッセージ (原文)

Over the last three decades, I have had the great privilege of teaching classes and giving presentations on behavior science in many different countries around the world, as well as in many regions of the United States. I feel very fortunate to have had an opportunity to do so

in Tokyo this past summer, and am grateful to Dr. Yamamoto and Dr. Sakagami of Keio University for making these arrangements. These experiences have assured me that the science of behavior is being pursued ever more rigorously and that its applications are in ever expand-

ing demand. They have also convinced me that relatively little progress has been made in the interpretive branch of this science since its inception more than half a century ago, and that its underlying philosophy, having escaped critical analysis, remains severely underdeveloped.

Perhaps I am overly sensitive to these failures because it is on these very aspects of behavior science that my own work is focused. Nonetheless, I have noticed that few graduate programs in behavior science provide adequate training in the interpretation of complex human behavior, and fewer still offer any training whatsoever in the philosophy of this science. Even more disturbing than the lack of training in these areas is what appears to be a lack of appreciation for their value in sustaining the validity and significance of this science. I worry about the widening gap that a lack of interpretive skill may be producing between the investigative and applied branches of behavior science. I fear that the investigative branch of our science will be irreversibly weakened with out proper connection to the applied domain, and that the applied domain will become increasingly less grounded in scientific study. I worry too about the risk of contamination of our science from traditional sources that a lack of training in behavioral philosophy may be producing. I fear that the

most unique, and powerful features of behavior science, namely its naturalistic premises, may be unknowingly compromised – especially as we enter into interdisciplinary relations with other sciences where these features are wholly absent. For these reasons, I encourage greater study of interpretation and philosophy in graduate programs everywhere.

The scholarly attitudes and intellectual curiosity of the students in the seminar gave me great hope for the future of the science of behavior. Their preparedness for leadership roles in this field is owing to their teachers, of whom I honor most especially and respectfully, Dr. Masaya Sato, as well as all those involved in the exceptional behavior analytic training programs in Japan.

On a less serious, though none the less enjoyable or culturally relevant note, I want to thank everyone for taking such good care of me while I was in Japan. Thank you my friend Naoko, for an authentic evening of sushi. Thank you Nozomi for sharing your culture with me every day at lunch. And thanks for letting me be one of you on the Karaoke night – I have *The Blue Hearts*' CD to remind me! Thank you all for the opportunity to experience the eloquent refinement Japanese culture – as well as its progressive unconventionality! Thank you.

---

## 学会サービス電子化アンケートの結果 広報委員会

第24回年次大会(2006年9月1-3日、於・関西学院大学)で、日本行動分析学会の各種サービス電子化についての意見調査を実施致しました。その結果を御報告致します。尚、記事の末尾に質問項目と集計結果を掲載いたしました。適宜御参照下さい。

### 学会から会員への連絡の電子メール化

これについて反対意見はありませんでした。他の学会では既に実施されていることであり、当学会でも積極的に推進すべきと考えられます。具体的な実施方法については意見が分かれています(Q5-1)。

## 各種手続きの電子化

入会，退会，住所変更，大会参加登録，論文投稿などを web 上で行なえるようにしようという提案です。経費や技術上の問題から早期実現は困難だと思われるが，積極的に推進すべきという意見を尊重したいと思います。

## ニューズレターの電子化

ニューズレターの電子化についても、圧倒的多数の賛成がありました。しかし配布方法については、意見が分かれています (Q6)。想像するに、わざわざ web 等に見に行くのは煩わしい、と考える会員と、容量の大きいメールを受け取るのは嫌だ、と考える会員がいるようです。印刷物併用希望の声も少からずありますが、経費・手間の削減という意味では印刷物併用は効果が期待できません。電子版だけになると、会員異動情報の掲載が難しくなる点も検討課題です。メーリングリストあるいはそれに代わるもの

行動分析学に関する会員相互、あるいは非会員も含めた情報交換の場を、今後、どのように運営して行くか、という問題に関する質問でしたが、今回の調査で、もっとも意見が分かれたのが、このテーマだったようです (Q7)。

意見を分析する前に、質問にある「ボランティア運営が難しくなっている」という理由が判然としない、という御指摘がありましたので、この点について御説明致します。bml というメーリングリスト (ML) は、10 年前に、何人かの行動分析家と相談して、望月が個人的に設立したもので、現在でも私の以前の職場のワークステーションで運営しております。近年、セキュリティ管理の問題から、独自のサーバを稼働させることが難しくなっており、さらに、旧国立研究機関 (現在は独立行政法人) の研究開発用設備を、いわば目的外利用することについても、問題視されるようになりつつあります (色々な大学や企業が、自分達の資源を無償で提供し合っただけのインターネットを支えていた昔を懐かしく思います)。そのような事情で、bml に代る情報交換の仕組みを検討しております。

さて意見の違いですが、まず「情報交換」という言葉の捉え方に、個人差があるようです。ML の情報交換は、誰かが少しだけ手間をかけて、自分のできる範囲で他の人に役立つ情報を提供する、というものです。「自分のできる範囲」の回答ですから、その内容は不十分だったり不正確だったりすることもあり得ます。質問する人ばかり多くて、回答してくれる人が少ししかいなければ、回答者の負担が重くなり過ぎて、ボランティアとしての情報提供は成立しなくなってしまうでしょう。

一方、学会として一般人向けに情報を提供したり質問に答えたりするような仕組みの必要性を感じている会員もいるようです。これは大切なことだと思いますが、正確な情報を迅速に提供するという負担を要する作業が、果たしてボランティア活動として実現できるか、難しいところだと思われます。

情報交換の仕組みとして ML ではなく、電子掲示板の希望が 33% ありました。その理由のうち「不要なメールを受け取りたくない」という点については、ML 方式であっても、投稿ログを web で閲覧するだけにして、ML からの直接配信を受けない設定を可能にすれば、実現することが可能です。

ML や電子掲示板の運営については、匿名投稿を認めるか否か、という問題があるように思います。今回の調査では、この点に関する意見はありませんでしたが、bml を運営していて、何度かこの問題を感じました。発言の正確さを保ち、必要なら再質問ができるという意味で、本名と所属を明らかにして発言する、というのが学問の世界では鉄則になっています。学会で発表者に質問するときも、名前と所属を言うのがルールです。

しかし、こうしたルールの背後には、自分が所属する組織とは無関係に、個人の資格と責任において発言することができる大学教員という立場の特殊性が存在しています。仮に私が「帝京大学の望月です」と名乗った上で、何かの会

合で文部科学省の政策を批判したとしても、それが帝京大学を代表した意見だと受け取られることはないでしょう。

ところで、日本行動分析学会は、大学関係者以外の会員が活発に活動しているという優れた特徴があります。様々な職業の会員が存在するわけで、ときには、所属組織を名乗って公的な場で発言することが躊躇われる場合もあると思います。或は心理学や行動分析学とは全く無関係な職業に就いていながら、個人的な関心として行動分析学と関わっている場合、所属を明らかにすることに、どれだけの意味があるのか疑問でもあります。

活発な情報交換を実現するには、誰もが自由に気軽に発言でき、かつ情報の質を維持するような方法を検討する必要があるかも知れません。

#### 質問項目と集計結果

84名の方から寄せられた回答の集計です。尚、自由記述の内容については、適宜要約整理させて載せました。

**Q1. 会員連絡の電子メール化:** 会員への各種連絡に電子メールを利用すると、費用をかけずにタイムリーな情報提供が可能になります。このことについて御意見をお聞かせ下さい。

賛成: 79 (94.05 %)  
 反対: 0 (0.00 %)  
 無回答: 5 (5.95 %)

**Q2. ニュースレターの電子化について:** 『行動分析学会ニュースレター』(以下NL)を、インターネットを通して電子的に配布すると以下のようなメリットが生まれます。

- 年間40万円近く必要なNL印刷・郵送の費用を、学会の他の目的の為に役立てることができます。
- 発行時期や頁数など、より柔軟な刊行が可能になります。このメリットを考慮した上で、NLの電子化に、

賛成: 80 (95.24 %)  
 反対: 1 (1.19 %)  
 無回答: 3 (3.57 %)

#### 自由記述から

- 個人情報への対策を十分に。
- ウィルス対策を講じよ。
- 電子版NLは画面上での読み易さに配慮せよ。
- 数十年単位でのNLの保存を考えよ、バックナンバーをpdf化せよ。

**Q3. 行動分析学メーリングリストについて:** 行動分析学に関する情報や意見を、電子メールを使って交換する仕組みとして、現在、bmlというメーリングリストがボランティアにより運営されていますが、色々な事情で、ボランティア運営が難しくなっています。そこで日本行動分析学会で、行動分析学の情報交換のための仕組みを作ろうというアイデアがあります。学会がこうした仕組みを作ることに、

賛成: 78 (92.86 %)  
 反対: 1 (1.19 %)  
 無回答: 4 (4.76 %)

**Q4. 各種手続きの電子化について:** 今、お答え戴いているような調査も、ウェブサイトなどを使って実施することができます。入会・退会・住所変更、あるいは年次大会の参加申込なども、将来的には可能になるかも知れません。このように、学会活動にコンピュータ・ネットワークを活用することについて、以下から1つ、お選び下さい。

積極的に推進し、可能な限り電子的方法に移行すべき	50 (59.52 %)
現状より経費節減になる限りにおいて利用すべき	25 (29.76 %)
従来の方法と併用するのであれば活用すべき	6 (7.14 %)
コンピュータ・ネットワークの利用には反対	0 (0.00 %)

#### 自由記述から

- セキュリティを確実に。
- コンピュータが使いにくい環境にある会員への配慮を十分に。
- 携帯電話への転送なども配慮せよ。

Q5. 電子メールによる連絡・情報提供について詳しくお聞きします

Q5-1. 電子メールによる学会からの連絡方法として、どのような方式を希望しますか？ 1つお選び下さい。

重要な連絡も、各種催し物の案内などのような情報も、電子メール化できるものは全て電子メールにして欲しい	34 (40.48 %)
全てを電子メールにしても、重要な連絡は、郵便を併用して欲しい	45 (53.57 %)
電子メールによる連絡は重要なものだけに限って欲しい。催し物案内のような情報は受け取りたくない	3 ( 3.57 %)
電子メールによる連絡は受け取りたくない。受け取れない	0 ( 0.00 %)

Q5-2. あなた御自身の、現在の電子メール環境についてお聞きします。1つお選び下さい。

職場でも自宅でもコンピュータを使って、いつでも電子メールを読むことができる	61 (72.62 %)
コンピュータを使って電子メールを読めるが、手間がかかったり、時間が限られたりする	21 (25.00 %)
携帯電話でしか電子メールを読むことができない	1 ( 1.19 %)
一切、電子メールは使えない。使いたくない	0 ( 0.00 %)

Q5-3. 学会からの連絡を受ける電子メールアドレスについてお聞かせ下さい。現在お使いのアドレスを学会に登録したくない、とお考えの方で、別アドレスを用意できる方は、そのアドレスについてお答え下さい。

最低 2 年程度は変化しない、コンピュータ用のメールアドレスを持っている	66 (78.57 %)
コンピュータ用のメールアドレスがあるが、頻繁に変わる可能性がある	10 (11.90 %)
携帯電話のアドレスしか持っていないが、そのアドレスは最低 2 年程度、変えていない	2 ( 2.38 %)
携帯電話のアドレスしか持っておらず、アドレスも頻繁に変わる可能性がある	0 ( 0.00 %)
電子メールのアドレスは一切持っていない	0 ( 0.00 %)

Q6. ニューズレター (NL) の電子化について詳しく伺います

Q6-1. NL を電子化した場合、あなた御自身にとって最適な配布・閲覧方法は、どのような方法でしょうか？ 1つお選び下さい。

NL 全文を電子化して、刊行のたびに電子メールで受け取りたい	40 (47.62 %)
NL そのものはウェブサイトに置き、発刊通知だけを電子メールで受け取りたい	34 (40.48 %)
NL そのものはウェブサイトに置き、発刊通知を blog に掲載して欲しい	6 ( 7.14 %)
NL も発刊通知も学会ウェブサイトに掲示するだけで良い。個別の連絡は必要ない	1 ( 1.19 %)
その他	0 ( 0.00 %)

Q6-2. どのような配布・閲覧方法であれ、NL を電子化した場合、あなたは NL を...

これまでより、よく読むようになると思う	17 (20.24 %)
今と変わらないと思う	63 (75.00 %)
今までよりは、読まなくなると思う	1 ( 1.19 %)
電子化されたら、ほとんど読まなくなると思う	2 ( 2.38 %)
その理由は (複数回答可) ・コンピュータで物を読むのが嫌いだから	1 ( 1.19 %)
・好きな時に読めなくなるから	1 ( 1.19 %)
・その他: コンピュータを使わないから	1 ( 1.19 %)

Q6-3. NLを電子化した場合、今までの印刷物も必要でしょうか?

電子版だけで読むので、印刷物は必要ない	71 (84.52 %)
今まで通り無料で、印刷物も郵送して欲しい	10 (11.90 %)
印刷、郵送にかかる実費 (手数料を含めて) を、年会費とは別に負担してもよいから、印刷物を郵送して欲しい	1 ( 1.19 %)
今まで通り、無料で印刷物として受け取れるのであればNLは読まない	0 ( 0.00 %)

Q7. メーリングリストについて詳しく伺います

Q7-1. 情報交換の仕組みには、電子メールを使うメーリングリストという方法、特定のウェブ・サイトに書き込み・閲覧をする、電子掲示板のような方法など、幾つかの方法があります。どの方法が、あなたにとって、最も使いやすいでしょうか? 1つお選び下さい。

メーリングリスト: 50 (59.52 %)  
電子掲示板: 28 (33.33 %)  
その他: 1 ( 1.19 %)

自由記述から

- mixiの行動分析学コミュニティーに移行する。
- 通知機能つき電子掲示板が良い。

- 一般からの問い合わせが多いと思われる障害児教育について、それを受ける別のMLがあると良い。
- 行動分析学の専門家とそうではない人達との情報交換の場になるような電子掲示板があると良い。
- 電子掲示板支持の理由としては:
  - 投稿ミスなど訂正ができる。
  - 管理者がいた方が良い。
  - 不要なメールを受け取りたくない
- ML支持の理由としては:
  - 手元にlogが残せる。

Q7-2. どのような方法であれ、学会が情報交換の場を運営する場合、それは会員専用にするべきでしょうか? 会員以外でも行動分析学に興味を持つ人達たちの参加を認めるべきでしょうか? こうした仕組みを維持するには、学会が毎年数万円程度の費用を負担することになります。学会のお金を非会員の為に使うべきではない、という意見もありますし、行動分析学の普及と宣伝になるのだから学会の費用を使っても実施すべきだ、という意見もあります。この点について、どのようにお考えでしょうか?

積極的に、非会員もメンバーにすべきである	21 (25.00 %)
会員専用のサービスにするべきである	11 (13.10 %)
会員専用と一般向けを別々に運営するのが良い	25 (29.76 %)
何らかの制約を設けた上で、非会員もメンバーに加えて構わない	11 (13.10 %)

制約の案:

- 非会員には幾らか (年500円とか) 会費を払わせる。
- 正会員の推薦を参加条件にする。
- 事務局が判断してメンバーを選別する。

Q8. どんな情報が欲しいですか？日本行動分析学会では、今後、ウェブサイトや blog、電子メールなど活用して、会員の皆様に様々な情報を提供していきたいと思います。こんな情報があれば便利だ、というアイデアがありましたら、幾つでも御記入下さい。こんな情報を発信したい、という御提案も歓迎です。

新刊書情報、専門用語集、過去の論文を pdf 化したデータベース、オンライン・ジャーナル、論文情報、研究会・研修会・ワークショップ・講演会などの情報、論文検索、学生の為の研究情報データベース、雑誌掲載論文について議論・質問のできる電子掲示板、web site の更新を頻繁に。

## 自著を語る：『アクセプタンス&コミットメント・セラピーの文脈：臨床行動分析におけるマインドフルな展開』への招待～『海辺のカフカ』風

武藤 崇 (立命館大学)

「シホノさん」と『世界の猫』を開いていたタナカさんが言った。

「なんだい？」

「シホノさんが読んでいるその本は、何の本でありますか？」

「これかい？ これは『アクセプタンス&コミットメント・セラピーの文脈』っていう心理療法の本だよ」とシホノ青年は答えて、表紙をタナカさんに向けた。

「タナカは字が読めませんので、オレンジ色であることと字がそこに書いてあるということしか分かりません。『アクセクするな、ミットモない』でありましたか？」

「違うよ、おじさん。でもまあ、全くハズレてはないかもなあ」とシホノさんはスワローズの帽子のつばをしごきながら言った。「それは行動分析っていう考え方に基づいた心理療法らしいんだ。俺っちも、精神分析くらいなら聞いたことあるけど、行動分析ってのはねえ」

「その行動分析っていうのとアクセクさんとは、どのようなつながりがあるのでしょうか？」とタナカさんは尋ねた。

「それは俺にも無理だよ。でも、どうも行動分析ってのは、クラスに一人はいるような、最初取っつきにくいけど、付き合ってみると意外にいいヤツで、そのうちにどんどん味わい深さなんかが出てくる、っていうスルメみたいなもの

らしいよ」

「タナカもスルメは好きであります」

「おじさん、スルメはあくまでもメタファーでさあ……まあいいや」と青年は軽く首を振りながら帽子を被り直した。「ふむ。それでさ、その行動分析っていうので心理療法を考えていくと『人生、楽ありゃ、苦もあるさ』ってな構えになった方が生きやすいときもあるよ、となるらしい。けど、そういうのを頭でなくて、実際の生きざまでやってのけるのはけっこう難しい。それを手助けするってのがアクセクさんということになるかな」

「アクセクさんですか、アクセクさんなんですかね」とタナカさんは目の前にそのような名前の人がいるかのように繰り返した。

「実を言うと、俺も不思議なオレンジ色の本だったから手にとっただけでさ……しかも村上春樹がけっこう引用されてたりしたから、ちょっと読み始めてみたんだ。編者も何かしらの思い入れがありそうだったしな」

「変者、でありますか？」

「へんじゃ」と青年はつぶやいた。「確かに。それは多分にあると思うぜ。『へんじゃがへんじゃ』……かなりのオヤジ・ギャグだけど当を得てるよ。そうそう、それで思い出した。この前まで読んでた『海辺のカフカ』でちょっと気になった部分があったんで書き留めておいたん

だ。 - 中略 - そうやって考えると、編者も行動分析にそれと似たものを感じたのかもな」「それでは、そのアクセクさんの本は<入口の石>みたいなものでありましょか？」「そう。行動分析ってヤツの<入口の石>だ、

タナカさん」

「はい。メタファーなのでありますね、シホノさん」

【参考文献】 村上春樹（2002）海辺のカフカ 新潮社．

## 自著を語る：『猫のクリッカートレーニング』

杉山尚子（山脇学園短期大学）

2006年11月に、カレン・プライアの『猫のクリッカートレーニング』の邦訳を二瓶社より上梓した。見本刷りが送られて来たのは、11月22日のことだった。ちょうど翌日、雑誌『ドグパラ』の企画で、わが国ではじめて正の強化を用いたドッグトレーニングを始めた、アニマルファンシアーズクラブ（AFC）代表の佐良直美さんとの対談が組まれており、出来上がったばかりのこの本を1冊、佐良さんに献呈した。居合わせた『ドグパラ』編集者は「猫もクリッカートレーニングできるのですか？」と半信半疑の様子であったが、行動分析家にとっては、答はもちろんイエスに決まっている。この本には、クリッカーを使った猫の問題行動の修正ばかりではなく、猫が、特に都会で室内飼いをされている猫にとって有益なトレーニングが写真入りで紹介されている。（なお、原著には写真は無い。カレンが日本語版のために好意で送って下さったのである。ただし、私が撮った写真も2枚混ぜてある。）現代にあっては、人間の都合で、本来の生態からかけ離れた形でペット動物を飼っているのだから、一見人工的に感じられるこうしたトレーニングは、むしろ野生の本能を呼び覚ます（これでも行動分析家か！）上で不可欠のようにも思える。

このお正月休みには、AFCに海外からトレーナーが3名来日するとのことで、誘われるままに、10日間滞在するチャンスを得た。那須山麓にある2万坪という広大な敷地（庭師のおじさ

んは3万6千坪と言っていたが、どちらが正しいかは不明）で展開されるさまざまなトレーニングに接したことは、実に得難い体験であった。

「先生は理論はおわかりでしょうが実地はどうですかね」と、佐良さんからかわれながら、生まれて初めてリードを持たされただけでなく、いきなりアジリティをさせられた。（もちろん大恥をかいた）。その後、自省をふまえて見学したオビディエンス訓練、アジリティ、フリースタイル、トラッキングは、ある意味で目から鱗の連続であった。動物のトレーニングに強化の原理が必要不可欠であることは、読者のみなさまにも百も承知のことであり、実際、それが随所で行われてはいたが、私にとって驚きであったのは、（読者にとっては百も承知かもしれないが）、弁別刺激によるコントロールが多用されていることであった。

動物のトレーニングは、盲導犬や警察犬や軍用犬の訓練、サーカスで旧くから行われてきた。1910年には、今日いうところのシェイピングなどのオペラントの技法を使った盲導犬や警察犬の訓練マニュアルが、ドイツの軍人Conrad Mostによってすでに出版されたが、この世界とスキナーが発見した行動随伴性の考え方が意識的に結びつくのは1960年以降のことである。その後、カレン・プライアの出現によって、オペラントの原理による動物トレーニングは大いに普及したが、この世界にはわれわれが提供できる知見はまだまだあると共に、今後の研究が期待

される事柄は実に多いことを実感した次第である。(本会会員の中島定彦先生によるレビューが『生物科学』に近々掲載される)。

この本を最後に啓蒙書からは手を引くことを決めていた私にとって、この本は一種の終着点であるのだが、そういう意味では出発点になってしまった。

何だか「自著を語る」ではなくなったが、実は、本書の最後にある「訳者あとがき」で、すでに自著を語ってしまったからである。そういうわけで、本当の「自著を語る」を読んでいただくためにも、ぜひ本書を手にとっていただきたいと思っている。

---

## 自著を語る：『みんなの自立支援を目指すやさしい応用行動分析学』 高畑庄蔵 (北海道教育大学札幌校)

応用行動分析学を勉強するのに早すぎることはありません。

応用行動分析学を勉強するのに遅すぎることはありません。

私はいつも疑問を持っていました。「なぜ、あたたかい理念と効果的な方略を持った応用行動分析学が常識にならないのか？」

「この人の指導はすごいなあ。」と思う指導者は、応用行動分析学の方略を根拠にした指導を展開しています。しかし、本人には自覚がありません。名人芸で完結してしまうのです。これではせっかくのよい実践もみんなのものになりません。

私は養護学校の現場で 18 年間過ごしました。そこでよく先輩から言われました。「人の真似をするな。」と。授業研究も負の強化随伴性そのものでした。なぜなら研究と言いながら崇高なテーマたてて、考えられない時間とコストを使って、残るものは…?。

これからは科学を基にお子さんのライフステージに切れ目のない「シームレスな教育・福祉」を実現しようではありませんか。拙著(みんなの自立支援を目指すやさしい応用行動分析学 「支援ツール」による特別支援教育から福祉、小・中学校通常教育への提案 <http://www.meijitoshu.co.jp/shoseki/shosai.html?bango=4%2D18%2D020024%2D4>)にはそのヒントがたくさん書かれています。

福祉と同様に教育も大転換期を迎えています。それが「特別支援教育」です。

特別支援教育では、子どもたちの「生きる力」を育むことがねらいとされています。軽度障害を含め、支援の対象は 1.3 % から 7.3 % と大きくなり、支援者の専門性向上がますます求められています。これからは、美辞麗句を並べたスローガンではなく、実践的で専門的な支援が必要とされます。

私事で恐縮なのですが、あるけがを負い入院しました。その時、入院先の整形外科専門医である担当医と退院後担当医となる私の弟の 2 人が、治療方針について議論しました。その結果、2 人とも同じような診断と治療方針を出したのです。つまり、整形外科学を根拠に判断し、手術ではなく保存療法で治療を続けるということでした。おかげで今は元気に活動できるようになりました。

特別支援教育において、発達障害児を支援する時に、2 人の教師がいたとします。どのようにアセスメントし、具体的な支援を行うのでしょうか。どのような学問を根拠に判断するのでしょうか。おそらく 2 人の見解は大きく違うでしょう。なぜなら 2 人は今までの経験則を根拠にするしかないからです。

教師が変わったら、支援の方法は大きく変化します。担任が変わったら子どもが混乱するという経験をみなさんは持っているのではないで

しょうか。なぜならそれは、特別支援教育を実践する根拠となる学問がないからです。整形外科学を知らない医師に治療や手術をまかせることはできますか。私は死にたくありません。

私は、中学生でも読める漫画中心の専門書を出版する機会を得ました。少しでも多くの方に読んでもらい、応用行動分析学を常識にしたかったからです。

欧米では常識になっているのに、日本の現状は…このままだと崩壊するでしょう。

現に、私の友人の中学1年生の娘やおばたちが面白いと言ってくれています。

拙著ではありますが、ぜひとも先生の授業でご紹介ください。学生に支援ツールでづくりを課題に出すと、めちゃめちゃ盛り上がりますよ。

---

### 海外在住会員の皆様へ 事務局

そろそろ次年度の会費納入時期となりますが、それに関連しまして事務局からのお知らせがございます。海外在住会員の会費納入方法は「International Money Order」にてお支払いをいた

だくこととなりました。よろしくご協力のほどお願い申し上げます。また、ご不明な点は事務局までご連絡ください。

---

### 編集後記

#### ニューズレター編集部

ニューズレター編集を担当するようになって漸く3号目を発行できました。不慣れな編集作業で、発行が遅れ、皆様には御迷惑をお掛けしております。まだ、発行するだけで精一杯の状況ですが、春からは少しずつ新しい企画を盛り込みたいと思います。その手始めとして、今

回はリンダ・ヘイズさんの原稿を掲載してみました。海外の著名な行動分析家からの英語での寄稿というのは、ニューズレター初の試みと思います。今後とも『J-ABA ニューズ』を宜しくお願い申し上げます。

---

#### ニューズレター編集部よりお願い

ニューズレターには、個人情報に記載されている場合があります。会員の皆様が、このニューズレターを御覧になった後、処分される場合

は、処分方法について十分に御留意下さいますようお願い致します。

### 『J-ABA ニューズ』原稿募集!

書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、資格問題への提言、学会に対する提案や批判、求人情報、イベントや企画の案内など、さまざまな記事を募集しています。原稿はテキストファイル形式で電子メールにて、下記ニューズレター編集部宛にお送り下さい。なお、ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属します。掲載された記事は、原則的に、日本行動分析学会ウェブサイトで公開いたしますので、

公開を望まない事項（例えば、メールアドレスなどの個人情報）がある場合には、あわせてニューズレター編集部までご連絡下さい。

192-0395 八王子市 大塚 359  
帝京大学文学部心理学科内  
日本行動分析学会ニューズレター  
編集部 望月 要  
E-mail: moc@main.teikyo-u.ac.jp